

炉辺の枕（2）

『私の松本清張論—タブーに挑んだ国民作家』辻井喬 清張作品の魅力の本質

美賀多台 つだわたる

著者の辻井喬は、セゾングループの代表であった堤清二のペンネームで、私の敬愛する映画評論家山田和夫の畏友です。第一級の実業家ですが、辻井喬の名でたくさん詩や小説などを書いています。

彼の本はほとんど読んでいませんが、松本清張は好きな作家なので、辻井喬がどのように評価しているのか気になり、10年以上前に読みました。とても面白かったので紹介します。



「一作家について本にまとめたのはこれが初めて」といいますが、戦後の文学に大きな影響を与えた松本清張という魅力的な作家を、分かりやすく解きほぐしました。

本の帯に「社会的弱者、差別された側に立つ新しい『民衆作家』像」とありますが、その視点から、松本清張の全体像を書いています。

清張の魅力

まず「国民作家」という切り口で、吉川英治や山本周五郎、司馬遼太郎と比較しながら『国民文学』と言うような特別な文学ジャンルはないが「その時代に即して大勢の人びとの意識を反映しているので広く読まれる作品」であり「その時代の多くの人々の感性を表現している」作家の一人で、しかも異質であると評価しました。

その上で松本清張は「近代文学が欠落させた部分を補う役割を果たした」と言いました。

それは「推理小説という形態を借りて現代社会の腐敗や権力の横暴、強者の非人間性といった問題に自由に踏み込んで」いるというものです。

「彼につけられている『社会派』と言う呼称の本質は、題材が社会的だという以前に、弱いもの、差別されるものに対するシンパシーがあつての社会派」であることが、清張作品の本質と言います。

「善と悪の葛藤を描きながら、それを決して登場人物の善玉か悪玉か」に落としこまないことや「反俗精神と世俗性が同居」していることが特徴と分析します。

他の文学者

三島由紀夫は清張を「文学として認められない」と全否定し、清張は、全共闘に共感を示す三島を「現実世界をとらえることのできない」と認めていません。

大岡昇平は文壇の「価値紊乱者」清張に嫌悪感を示したと紹介しています。

歴史を題材とする時の清張と司馬遼太郎との違いについて、清張は「彼はやはり歴史上の人物を素材として書いているわけね。だから人物が司馬遼太郎のものになっている」「ぼくは上から人間を描いたことがない」といったと紹介しています。

そして清張論を借りながら辻井喬の歴史観社会観も明らかにされます。それ以下のような言葉です。

「日本の歴史の中を流れている基本的思想の特徴は、平和主義と平等主義」「大衆は自分の外のもの、とくにメディアに左右されているのです。わが国のメディアは極端といっていいくらい権力に弱く、世論を指導する見識などありません」明治維新は「下級武士階層が起こしたクーデターによって形だけの近代国家」と言っています。

この本がとても面白かったので翌年に出された「司馬遼太郎覚書『坂の上の雲』のことなど」も読みましたが、これも新鮮で読みごたえのある文芸評論でした。